

鈴木有郷 牧師 説教

6/21/09 「嵐を静めるイエス」 マタイ8:23-28

死は人間の宿命です。いかなる人間も死を免れることはできません。

愛する人が、突然自分の視界から消え去り、言葉を交わすことができなくなり、永久に顔を見ることもできなくなるという人格と人格の絶対的断絶は、あたかも訳の分からない怪物と出会ったような恐怖と絶望を私達に与えます。

今日読んで頂いた、イエスが嵐を静めるというエピソードは、実はそのことと関係があるのです。エピソードの内容は簡単なものです。イエスと弟子達が船に乗って湖を渡っています。突如として突風が吹き捲くり、船は木の葉の様に揺れ動きます。ところがイエスはぐっすりと眠ったままです。あわてふためく弟子達はイエスをゆり動かし、叫びます。「主よ、助けてください。おぼれそうです。」イエスは起き上がるとおじ惑う弟子達をたしなめ、嵐と湖を叱りつけます。すると突風はおさまり、湖は凧となったというものです。

このエピソードを、超能力者としてのイエスの凄さを示すものとする解釈は、全く意味をなしません。このエピソードには、もっと深い象徴的意味が込められているのです。より端的に言えば、死に直面した人間を励ますイエスの姿が描かれているのです。

その意味を私たちの最近の体験に引きつけて考えてみましょう。私たちのキリストにある姉妹村上清子さんが先週の土曜日の夜、長いご病氣の後亡くなりました。奥多摩の小さな教会で牧師をされ、幼稚園を造り、60才でアメリカに渡られた方です。

村上さんにとって教会は文字通り命の支えでした。朝の祈禱会、讃美歌を歌う会、礼拝、聖書の学びの会、それに求道者の会まであらゆる教会の活動に参加されました。

何回か入院され、老人ホームに移られ、最後にはホスピスで過ごされました。私達夫婦がお見舞いに行くと、顔を輝かせて喜ばれ、教会のことをいろいろ気にかけておられました。しかし私が最も心を動かされたのは、彼女の祈りの姿勢でした。お見舞いに行くと祈りの最中であつたことが何回もありました。

ホスピスに移られ、余命幾ばくもないことが分かってから、多くの皆さんが手分けをして村上さんをお見舞いに訪れました。胃に穴を開けて栄養物を流し込む延命手術を勧められたのですが、彼女は断り、自分はクリスチャンであり、神の身元に凱旋するのだから死ぬことは全く怖くはないと明言されました。その毅然とした姿に主治医は涙を流したと伺っています。

私がここで言いたいのは、村上さんは信仰の人であつたということです。イエスと共に歩んだ一人の勇氣あるキリスト者であつたということです。彼女は一人であつたけれど、独りぼっちではなかつたということです。死も彼女をおじ惑わすことができなかつたということです。

舟は私達の人生です。嵐は死の恐怖です。あわてふためく弟子達は私であり、あなたです。しかし、イエスは私たちと共におられます。突風に私たちの乗っている舟が大揺れに揺れても、イエスはものともせず嵐を凧に変えてくださるのです。

村上さんが最後の息を引き取る数時間前、私たち有志はベッドの回りに集まり、讃美歌を歌い、祈りました。その時村上さんの口から「あー」という声が漏れました。「アーメン」という意味だったに違いありません。昨夜行われた葬儀で拝見した村上さんの安らかな顔は、そのことを証明しているように私には思えました。

イエスは嵐を静め、凧に変えてくださいます。イエスこそ我らのやぐらです。砦の塔です。苦しい時の慰めです。平安です。